

スカウトちば

SCOUT CHIBA

「スカウトちば」は、日本ボーイスカウト千葉県連盟の広報誌です。

Vol. 100

2023年3月1日発行

CONTENTS

スカウトちば第100号 座談会

令和3年度 富士スカウト代表表敬

富士スカウト・隼スカウト知事顕彰会

第5回 千葉県ベンチャー

令和3年度 スカウト活動発表会



YEARS OF SCOUTING
IN JAPAN

1922 - 2022

「先輩と語る！ スカウティングと私たちの未来」

スカウティングにより得られたことは人それぞれですし、今の生活の折々で何らかの参考になっていることも多々あるでしょう。ここでは、それらを率直に語っていただきました。

司会 ● 宇山健太 運動拡充委員長

参加者自己紹介

ボーイスカウトに入ったこんな理由、あんな理由

宇山 ● 本日のテーマは、『スカウトちば第100号』の特別企画座談会『先輩と語る！ スカウティングと私たちの未来』です。ぜひ、みなさまにスカウティングで体験したこと、そのなかで今の生活に活かされていることなどを、お話しさせていただきたいと思っています。

はじめに、自己紹介を兼ねてボーイスカウトとの最初の接点からお願いします。

山田 ● 7つ上の兄がスカウトで、私はビーバーの最初から連れて行かれたという感じですね。今はボーイスカウトから離れてしまい、つくば市にある研究所に勤めています。

中村 ● 友だちにつられて私は4年生の「しか」スカウトからスタートしたのですが、学校でやらないようなことを毎週やって楽しいと感じました。非日常というか普段できない活動ができて面白かった。1990年に流山第3団のカブスカウトから始めて、ボーイスカウト、ベンチャースカウト、ローバースカウトをやりました。いまは、航空会社の運航乗務員をしています。最後に活動したのが、タイのジャンボリー。20年前になりますね。

高橋 ● 母のボーイスカウトに対するイメージは、「全部自分一人のできる人間を育てる」というもの。兄がやるというので、「じゃあ私も」という形になってボーイスカウトとして今日まで来ています。ビーバー活動から始めていまローバースカウト2年目。看護専門学校の2年生です。

村井 ● ボクは、引っ越しを機に、ゼロから何かを始めようと思ったときに体験会のチラシを手にしました。もともとアウトドアに興味があり、体験で活動したフィールドの野営場が素敵で楽しかった。もっと言えば、当時のカブ隊長が面白い方で、「このおじさん面白いから一緒に遊びたい」というのがキッカケですね。小学校5年の「くま」スカウトから始めて、今は大学2年生、ローバースカウトです。

岩井田 ● 2歳上の兄がボーイスカウトのイベントに行ったときに、「お兄ちゃんがやるなら私もやる!」ってついていきました。兄がローバースカウトに入隊しても、ずっとくっついていて、いまはローバースカウトも残りわずか。市役所に務めています。

中山 ● 母親に入れられました(笑)。私は一人っ子なので、母には同年代の子どもと活動するなかでコミュニケーション能力を身に付けさせたいといった思いがあったようです。あるイベントでボーイスカウトの活動を見て、気づいたら自分もボーイスカウトをやっていたという感じです。小学校2年生のビッグビーバーから始めて、ローバー3年目。あと少しでローバースカウトも卒業です。社会人3年目で、物流に関わるIT企業に勤めています。

ボーイスカウトに入ってみたら……

大失敗も振り返ってみれば良い思い出!

宇山 ● 入ってみてどうでしたか? 違和感とか、印象に残るエピソードとか。

村井 ● カブの「くま」では、ノコギリや鉋を使うのが刺激的で、学校では触れないような危ないものを使って竹を割ってみて楽しかったなという記憶があります。すごい嵐の中でのキャンプや、ジャリめしだとか、ところどころで勘弁してくれよといった経験はあるんですが、その後の楽しさで美化されて、悪い印象は残っていませんね。

高橋 ● 私は座っているより、いつでも動いていたいタイプです。ボーイスカウトのキャンプやハイキングなどの野外活動が楽しくて仕方なかった。小学校では学べないことを学べて、普通とは違った刺激を受けたのが楽しかったので続けてきました。振り返ると、失敗の方が記憶に残りますよね。怒られたのがすごく印象に残っています。

中山 ● ボーイの班長のときに、キャンプで大失敗をかましました。食材6時配給なのに7時に起床。何とか時短できないか——そうだ、みそ汁に卵を入れてしまえと考えた。そこまではよかったのですが、みそ汁に味噌を入れ忘れてしまった(笑)。こんな失敗談も面白エピソードですね。

岩井田 ● ビーバーからボーイスカウト一筋でしたので、他と比べられません。楽しいことばかりで、唯一嫌だったのが正月遊びの「人間かるた」。鬼の背中に絵札を貼って、みんなで追いかけ、捕まると顔に墨を塗られます。これが一番嫌な思い出です。

ボーイスカウトの体験があったので、何かやって詰まったり困ったりしたとき、「あのときできたんだから、何とかできるだろう!」と乗り切れますよね。

山田 ● 当時の隊長が面白かった。カブとベンチャーのときですが、あの人が面白かったから続けられた。彼は引出しが多くて広いので何でもできる。人としても面白く、嫌な思い出はまったくありません。

中村 ● 土曜日学校が終わってから日曜の昼間まで子どもだけでキャンプする。親元を離れて自分たちだけの空間で活動するのが楽しみでした。大きくなってから米軍の座間キャンプという普段は入れないところで、アメリカのスカウトとの交流のお手伝いをしたことも楽しい思い出です。

嫌だったことはただ一つ。タイのジャンボリーでサブキャンプのスタッフとして何でも屋的な仕事をしていたときです。トイレが詰まってしまって、灼熱のもとでトイレの配管に直接手を突っ込んで掃除しなければなりませんでした。これは思い出しても嫌ですね。

宇山 ● 先輩方は、何で続けられたのですか。

中村 ● 活動は個人の競技ではないですが、個人の力を高めるために集団で動く。個人で活躍する場もあり、チームとして力を発揮する場もある。それらが組み合わせられている。それが、やり続けていたいなと思うところに繋がっているかもしれない。

山田 ● ある程度の年齢がくると、何もボーイスカウトでやらなくともいいのかなと思うことがあります。稼ぐようになると、一人でもできることが多くなり、ボーイスカウトの価値を考えてしまいました。

中山 ● 一人でやれば、うるさいこと言われないし…(笑)。

宇山 ● どの年代が一番楽しかったですか。

中山 ● ローバーになってからかな。野外活動や奉仕活動ではなく、人と何かをやるのが好きなんだと最近思うようになり、結構ローバーでいろいろやらせてもらっています。「こんなことをやろう!」と考えて、一緒にやってくれる仲間がいる。これが楽しいのです。

中村 ● キャンプは好きだけど毎週キャンプをやるというほど好きではない。自分たちで何か作り上げていったり、グループでワイワイやりながら方向性を出していったり…。そういう他ではちょっとできないようなところがいいのではないかな。世間では「ボーイスカウト=野外活動」というイメージですが、「それだけではない!」と強く言いたい。もちろん、キャンプでのいい思い出はたくさんありますが…。

高橋 ● 同じ目標をもった仲間、同じ志をもった仲間たちとボーイスカウトとして活動していけるのがいい。

村井 ● ベンチャー時代が、一番何か物事に情熱を注いだ時期だった気がします。無人島に行ってみたくとか、同じ目標を持ったメンバーとグループプロジェクトなどで、一つの方向に向かって頑張っていける。同じ方向、ゴールに向かって一緒に行こうということを感じることができるといのは、なかなかない体験ですね。

岩井田 ● ジャンボリーのとき、ボーイスカウトというだけで一つの共通項があるように感じました。例えば、学校のクラスなどでは最初はマイナスからの状況で人間関係を築いていかなくてもはなりません、ボーイスカウトには共通のベースがあります。



中山 堯登
(白井第1団)



岩井田 慧美
(千葉第18団)



村井 岬樹
(千葉第9団)



高橋 あすか
(佐倉第2団)

社会に出て役に立つもの

自然に生かされているボーイスカウト経験

宇山 ● ボーイスカウトでいろいろな経験をしてきたわけですが、社会に出て役に立つものがありますか。

山田 ● 社会人2年目。研究所の研究者ですが、ここでは大きなプロジェクトをみんなで手分けして完成させていきます。その時に、協調性・チームワークが欠かせません。そこに、リーダーシップをとっての活動や、班制教育などが役立っていると思います。さらに、かなり年配の方との折衝などでも活かしていますね。

村井 ● 仕事は航空機の運航乗務員。その前は営業の仕事をしていました。ボーイスカウトでは必ず班長がいてそれをフォローするフォロワーがいる。そして時期が来れば交代する。いやでもリーダーシップをとらざるを得ないわけです。仕事をしていて思うのは、フォロワーをやっているよかったですということです。一緒に仕事をしている人のパフォーマンスを引き出すには、フォロワーの気持ちを知らないといけない。リーダーとフォロワーの両方をセットで経験したスカウト経験が意外と身に染みついていた。

中山 ● 共感します。リーダー、フォロワーの両方を経験したことで、相手の気持ちに沿った行動ができる。自分がリーダーだったらこうしてもらったら嬉しいな、フォロワーだったらリーダーにこう動いてもらいたいなとか。普通は、勉強が出来たり、スポーツがうまかったりする人がリーダーで、そうでない人はトップリーダーとしての経験ができません。ところが、ボーイスカウトでは半強制的にリーダー、フォロワーをやらされる。これこそ、「ここでしか学べないこと」ですね。

岩井田 ● グループでは、自分の位置というか、役割を認識しますよね。自分のやることはきちんとやるという責任感を身に染みて学んだのも、ボーイスカウト時代です。

村井 ● 社会に出てまだ経験は浅いので、話を聞いている中でリーダーシップについてわかった気でした。自分のボーイスカウトの経験を踏まえながら話をきいているうちに良く理解できて納得しました。

高橋 ● 学校の看護実習では、小さな子どもからすごく高齢者まで関わります。ボーイスカウトでビーバースカウトから指導者まで幅広い年代の方と関わるのは、自分の中ですごく大きなことです。楽しいですし…。

フリーディスカッション

居場所としてのボーイスカウト

宇山 ● いろいろなお話ができましたが、これからフリーディスカッションです。

山田 ● 社会に出てからもローバーを続けるモチベーションは、どこにあるのですか。

中山 ● 外でもできるけれど、自分が外に出ようとしていないという側面がありますね。やはりボーイスカウト活動が楽しいからかな。

岩井田 ● 私はローバースカウトですが、ベンチャー隊の副長もやっていますから、ローバースカウトだからどうだ、という意識はありません。後輩がいるのが大きいですね。後輩が頑張っているの、私も彼女のために頑張ろうと思う。誰かのために頑張ろうという目標がある。ボーイスカウトをやっていない自分が想像できません。スカウティングをやっていることが当たり前で、選択の余地がない。

中山 ● 仕事は仕事でノリノリなんですけど、ローバースカウトをやっているベンチャー隊の副長をやっている、平日は仕事で土日が足りないというのが、ここ数年続いています。でも、何で外に行かないんだろう…。やっぱり仲間がいる、後輩がいるということですね。昨日、「くま」体験キャンプをやったのですが、一昨日の夜ボーイ隊長から「夜だけでも来られないか?」と電話がきました。「ハイかYESしかないな」(笑)と思って、「はい、行きます!」と夜だけ行って、わいわいキャンプファイアを盛り上げました。

自分にはお世話になった先輩がいるし、一緒に活動していた後輩もいる。ボーイ

スカウトが、拠り所になっているのかな? あの人がいるから続けているとか、あの呼ばれたら行こう。行ってやらなくなったら、こいつ辞めちゃうんじゃないかな。すごく、天狗ですけど(笑)。そう思っているから幸せなんじゃないかな。

村井 ● 死ぬまでスカウト、死して後までスカウト、というのがありましたね。

高橋 ● スカウトの辞め時は考えづらい?

中山 ● 実は、今一番、それを考えている。区切りという言い訳があるのと、それなりに社会人として忙しくなっている。ボーイスカウトと社会人の両立をされていて、最後の最後には、他にやりたいことがあったらボーイスカウトを辞めますね。よりよき社会人を育てるボーイスカウト活動のせいで、よりよき社会人になれない現象があったら起こりそうなんです。バランスをよくしないと。両方できるのがベストですが、いまのオレでは両方でできない。ボーイスカウト自体は好きだし、やっていて楽しいし、身につくものがあるので、本当の最後の最後に辞める。

村井 ● ローバースカウトは25歳までという年齢設定があります。そこに何らかの意味があると思う。社会に出て働くというタイミングまでローバースカウトとして活動する。私はまだ3年目ですが、社会に出てからはボーイスカウトとの関わり方がさざぐりになると思います。先輩たちの話を聞いていて、数年後の自分がボーイスカウトと関わっていく姿がふと頭に浮かびました。

社会に出て自分がどんな働き方をするかわからないので、できる範囲で活動するのか、少し距離をとって社会人として頑張ってみるのか。辞めるといふより、少し関わり方を変えようという感覚。キッカケがあったらまた距離が近くなるような形で続けるのかなという感じですね。

山田 ● 結婚して子どもができて、子どもがボーイスカウトに入って……また繰り返す。そこまでの間がどうあるかな?

村井 ● まさにそこに悩みがある。先々週、20年ぶりにカブスカウトと話をしました。3年生の子どもと体験活動に参加。「子どもがスカウトになると親として関わるかもしれない」と思ったら、ちょっとワクワクしましたね。一度離れても、こういう場面が突然やって来るのが面白い。これまでやってきたことが潜在意識のどこかにあって、「そうだ、そうだ。面白いな」というワクワクした気持ちが続いています。

中山 ● これまで、辞めようと思ったことはなかったですか?

高橋 ● 私、2年前まで別の団にいたんですが…。団員減で団が消滅するというので、今の団に来たんです。そのとき居た10人のスカウトのうち、同年代で移ったのは私と兄だけで、あとはみんな辞めてしまいました。そのときは、辞めるならこのタイミングだと思いました。でも、そのときには判断できず、転団しました。

村井 ● 居場所の一つになっていますね。入団時には同年代のスカウトがいなかったですが、先輩、後輩、仲間にも恵まれていました。学校では、友だちは進路がバラバラになってしまう。ボーイスカウトには地元で小学校や中学校から一緒にやっていた顔なじみの仲間がいる——大学生になったいま振り返っても、自分のコミュニティのなかで貴重な場ですね。

中山 ● 同期が辞めたときに、一瞬辞めようかなと考えましたね。カブが4人いて「しか」から「くま」になるとき一人辞めて、ボーイになるときにもう一人辞めて、3年目か4年目になるときに彼も辞めるという。あいつの班と競いたいと思っていたが、「自分は一人ではないわ」と思って結局、残りました。

岩井田 ● ベンチャースカウトになって、「富士スカウトになりたい!」。こういう思いがずっとあった。結果的には富士スカウトになったのですが、そこで富士スカウトはゴールではないと気付きました。まだ先はあるんだ。この先も道が途切れてなくて、辞めようと思うときがありませんでした。

村井 ● 学校で進路について考えるレポートを書いているときに、ボーイスカウト活動は一つの通過点でしかないのかなと感じました。ベンチャースカウトで富士に向けていろいろ挑戦してきて、それを次にどうつなげるかを考えることに、自然につながっていた。

私は大学ローバーですが、楽しかったとか、ためになるといった経験を後輩ばか



中村 千尋
(流山第3団OB)



山田 智宏
(袖ヶ浦1団OB)

りでなく、ボーイスカウト未経験者にも伝えて興味を持ってもらいたいと思って、活動に取り組んでいます。

スカウト活動が進路選択に与えた影響

直接というより間接的な部分が大かな？

村井 ● ボーイスカウトで国際交流をしたから、国際的な仕事をしたいとか、ベンチャーのプロジェクトで物理の勉強をプロジェクトの一つにしたいとか、将来の選択をするうえでボーイスカウトの活動が、それなりの役割を果たしていると感じる機会が多いですね。振り返ってみて、いかがですか。

中村 ● もともと海外に旅行をしたりするのが好きで、タイのジャンボリーも、それでいったようなものです。外に行くとか国籍や人種など、自分がマイノリティになる。そんなとき、自分がもともと所属している国を客観的に見るようになる。それが、ボクには強烈に感じられました。外に出るカルチャーショックと、もう一つの帰ってくるカルチャーショック。マイノリティになったとき、自分の大元のルーツを見たときに、外国の人からは、こういうふうに見えているんだとわかった。それが、自己発見に大きく寄与してくれたように思います。

仕事を決めるときも、海外勤務をイメージして最初は商社で海外というやり取りをする仕事でした。自分がマイノリティになったときにいったんリセットされて自分を客観的に見るようになった。ボクの場合は、自分の人生の決断をするときに、その判断材料の一つになっています。

山田 ● 高校、大学は天文・理系をやって、専門が変わって、粒子加速器の研究をすることになりました。この職に就きたいというときに、ボーイスカウトの経験が反映されるということとはなかったと思います。でも、働き始めてボーイスカウトをやっていたよかったなと思うことがあります。

中山 ● 就活について。IT業界はイケイケの業界じゃないですか。ITといってもいろいろあるが、物流に関わっているITなら絶対につぶれないという観点から選んだというのが建前。本音は、ボーイスカウトを続けたいので、土日休みなどカレンダー通り休めて、ジャンボリーを考えると夏休みが取りやすいほうがいい。仕事に通いやすいことも含めて検索して今の会社が見つかりました。ボーイスカウトを続けたいと会社を選んだくせに、時にはボーイスカウトを辞めたいと思ったりすることもあります(笑)。

岩井田 ● ざっくばらんにいうと、土日が休みだったからです。学生時代は生物学が好きで、生物学の研究者になりたいと思っていました。実際の仕事選びは、できるだけたくさん人の役に立てる仕事をしたい。自分が社会の中で何でもいから役に立ちたい。市役所の仕事は、直接市民の方に関わる仕事ではないし、どちらかというと陰に隠れてやる仕事です。でも、自分の働きが、いつか、たどりたどっていつか何かの役に立てる。貢献できているのではないか。こう考えて選びました。ただの自己満足かも知れませんが…。

後輩へのメッセージ

失敗や批判を恐れずやりたいことに挑戦!

宇山 ● 後輩へのメッセージです。アドバイスがあれば、思いのたけを語ってください。

中山 ● 伝えたいことはいっぱいあるのですが、うまくまとまらない。ローバーの最後まで活動を続けてきて、なんだかんだ言っても楽しく続けられたなというのは、先輩がいて後輩がいて、支えてくれている指導者がいて保護者がいる。もっというと、活動の先にも、キャンプ場のスタッフなどの隠れたサポーターがいる。本当にいろんな人がいるから活動ができてきたんだな。こう考えると自分一人ではできなかったし、本当にしあわせなことだと思います。おかげでよそではできない挑戦もできたし、いやなこともあったけど、そ

れも経験値でエピソードです。挑戦する権利をスカウトはみんな持っている。それをサポートする義務は周りの人たちにある。もちろん、やるからには責任をもってやるというのが、周りの人たちへの感謝の表れになります。どんどん挑戦して行けばいい。

岩井田 ● 時間と共に自分の周りの環境も変わっていく。そんなとき、一つの拠り所があるというのは大きなことです。ボーイスカウトをやっていない自分と比べるものがないので、ボーイスカウトで「これができた!」という明確なものがない。ただ、ボーイスカウトという組織に限り、絶対に一人ではない。仲間がいる。老若男女すべての年代が一つのムーブメントの一翼を担っている。自分のために、自分が属している社会のために、仲間のために、自分ができる最大限のことを行える環境が整っているというのは、幸せなことだなどと思います。とにかく仲間を大切に、自分も元気でやればよいのではないか。そんなに難しく考える必要はありません。

村井 ● ボーイスカウトでは、自分の挑戦したいことを幅広く選べます。例えば、ビーバースカウトでいえば「木の葉章」「小枝章」とかで、自分の好きなことに挑戦する。カブスカウトなら「チャレンジ章」、ボーイスカウト・ベンチャースカウトなら「技能章」など。いろいろなことに挑戦していくのが、すごくいいなと思っています。

何か自分が興味あること、好きだなということ、面白いと思うことに取り組んでいく姿勢、大変なときのどう乗り越えたいかとか、どう向き合っていくかという知恵や体験ができるのがボーイスカウトならではのことでないでしょうか。「最近、部活でこんなことで悩んでいるんだ」といったことも、ボーイスカウトの仲間と話したりする。こういうことが、先ほどの拠り所という言葉で表されたような場になっている。こうした経験の先に自分の将来の選択肢が見える。いろいろなことに挑戦してみるという積極的な姿勢、勇気を持って飛び込んでいく。こうした挑戦するうえで力を付けられるような場所だと思う。挑戦する際に応援してくれる、すごく力になる場所、集団だなと思う。

高橋 ● 学校とか家庭とかとはまた別のボーイスカウトという環境がある。これは、自分が将来何かに思い悩んだときとか、前に進む力が何かわからなくなったときにボーイスカウトという場が居所になってくれるし、ボーイスカウトの人たちは自分が何か悩んだときとか、自分がへこんでしまったときに、一緒に起き上がってくれると思います。そして、ただ起き上がらせてくれるだけではなく、どうやって起き上がればいいのか、どうやって前に進んでいけばいいよとか教えて下さる方々が多い。どういう活動をしていたりしても、悩んだり不安になったりしないで、自分がやりたいように前に進んでいけば一緒に行動してくれる大人の方々がいるということに力を、前に進んでいけると思います。

私は、ボーイスカウトが楽しいので長年続けられたのですが、仲間や指導者の方々からさまざまな価値観や考え方を教えてもらって、自分の将来を考えるきっかけにもなったし、ボーイスカウト活動のすべてが今、自分の力になって進んでいけていると思います。みなさまも、ボーイスカウト活動を楽しんで、自分の将来に少しでも役立ててくれたらいいなと思います。

中村 ● 今生きている世界って、100年前の人々が見たら夢物語ではないですか。何が言いたいかというと、挑戦すること、失敗を恐れぬこと。月並みかもしれないがこれ続けて行って欲しい。失敗を恐れず、批判を恐れずに自分のやりたいこと、自分の信じたことを一生懸命コツコツとやっていくことが、ありえない世界にたどり着く唯一の方法だろうと思います。これって一日にしてできたわけではなく、ずっと続けてきた結果今があるわけです。それを細分化していくと、小さなことの積み重ねです。失敗を恐れず挑戦してほしい。これが一つですね。ボーイスカウトでは、「そなえつねに」と言います。十分な準備は「転ばぬ先の杖」になります。困難にぶち当たったとき「準備したけどできるか!? どうしようか」となったとき、「ここは大丈夫だ」と思える。「これだけ準備したのだから大丈夫だ」と楽観的に考える。準備を進めた先はこう考えて、前向きに進めたい。悲観的に準備して、楽観的に対処するということです。サポートして下さる人への感謝の気持ちを忘れずに挑戦して、世の中をよりよく進化させていく。これが世の中の発展につながっていくわけです。

山田 ● 単純に言えば、楽しいことをやりましょう! 自分がやりたいこと、楽しいと思うことを、主体性を持って楽しくやる。ボーイスカウトにはそれをサポートしてくれる指導者がいる。それを続けていけば、自分がやりたいことを自分の頭で考えて決定して行動に移せるようになる。こういうふうにはボーイスカウトを使うことを考えてもいいと思いますよ。

宇山 ● あっという間の1時間半でした。ありがとうございました。

令和3年度 富士スカウト代表表敬

令和3年度に富士スカウト章を受章したスカウトの代表による秋篠宮皇嗣殿下とのご接見、および内閣官房長官、文部科学大臣への表敬訪問が令和4年3月31日に行われました。

千葉県連盟からは高橋 あすかさんが皇嗣殿下とのご接見、竹内 佳奈さんが首相官邸および文部科学大臣表敬訪問の機会をいただきました。

活動で得たもの

佐倉第2団 高橋 あすか

私は第17回日本スカウトジャンボリーや第24回世界スカウトジャンボリー、富士特別野営などへの参加を通して多くの大切な仲間と出会い、同じ志を持った仲間と協力して活動することの楽しさを感じてきました。出会った仲間達に刺激をうけ自身の課題が「リーダーシップ」であると気づき、プロジェクトではそのことについて取り組みました。そこでの学びは、学生生活の様々な場面で役立てることができています。

先日、秋篠宮皇嗣殿下とのご接見(オンライン)にて、各スカウトが実施したプロジェクトについて説明する時間をいただきました。殿下からは、今までの活動や今後の活躍について激励のお言葉をいただきました。殿下や他のスカウトの話をお聞き、富士スカウト章取得がゴールではないのだと改めて感じる事ができました。

私が富士スカウト章を取得することができたのは、私の富士スカウト章取得に対する思いを大切に、導いてきてくださった指導者の方々や先輩方、両親、そして共に活動してきた仲間達のおかげです。本当に感謝しています。

今まで支えてきてくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、後輩スカウトの指導や地域社会への奉仕を行っていきたくです。また、これまでの経験を活かし、今後も様々なことに積極的に挑戦していきたくです。



富士スカウト章取得と新たな目標

船橋第3団 竹内 佳奈

富士スカウト章に挑戦して得たものは、今後の人生の大きな糧になると感じております。

多くの課題をこなしていく中で計画性と実行力を身に付けることができました。特に第24回世界スカウトジャンボリーを通して行ったプロジェクトは、人前に出たり、自分から話しかけたりすることが苦手だった私の性格を変えてくれました。

内閣官房長官、文部科学大臣表敬訪問は貴重な経験となりました。様々な言葉をかけていただき、改めて富士スカウト章に恥じない行動を日々していこうと思えました。また、事前の宿泊準備では全国の富士スカウト章取得者が集まり、これまでの取り組みや今後について話し合いました。ほかのスカウトの富士スカウト章に対する思いや今後の展望が聞け、非常に刺激になりました。

今後は自団の後輩スカウトの指導を行い自団の発展に貢献するとともに、全国のローバースカウトと関わり社会に貢献できる様々な活動に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりますが、様々なスカウト活動に送り出してくれ金銭的な支援をしてくれた両親、富士スカウト章取得に際して支援していただいた千葉県連盟の皆様、また船橋地区ならびに船橋第3団の指導者の皆様に深く感謝申し上げます。



富士スカウト・ 隼スカウト知事顕彰会

令和2年度と3年度に富士スカウト章を受章したスカウト2名と隼スカウト章を受章したスカウト8名を対象に千葉県知事顕彰会が令和4年3月28日(月)に行われ、熊谷 俊人知事より激励の言葉を頂きました。

隼スカウト章を取得・千葉県知事 顕彰会に参加して

銚子第3団 小林 隼也

今回の隼章取得に向けての活動は大学受験の勉強と並行して行いました。限られた時間の中で何をすべきなのかを考え、実行してきました。この時ベンチャー隊が私一人だったため、できる活動が限られていました。そのためチームプロジェクトでは学校の部活動での活動を、2泊3日以上の移動キャンプを2人以上で行うという課題は3月に行われた千葉

県ベンチャーで行うといった工夫をしました。これらの活動を通して「仲間」の大切さを実感し、一人でもできることを考えることの必要性を知りました。また、私は3月に千葉県知事の顕彰会に参加させていただきました。貴重な体験ができてうれしく思うとともに隊長や団の方々、家族の支えがあってこそこれまでの活動ができてこの結果に繋がったと感ずることができ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。私は今ローバー隊になり、地区のローバース議長、千葉県ローバース議員(CRC)として活動しています。ローバー隊の活動の中で千葉県内での仲間を増やし、千葉県でのローバー活動が盛り上がるよう努力したいと思えます。

第21回千葉県キャンポリー シンボルマーク

第21回千葉県キャンポリーは新型コロナウイルス感染症の影響で開催することは出来ませんでした。千葉県連盟のボーイスカウト達は川邊春妃さんがデザインしてくれたシンボルマークを胸に多くの仲間と会えることを楽しみにしていました。

富津岬に輝く一番星

君津第2団 河邊 春妃

私が第21回千葉県キャンポリーのシンボルマークのデザインに応募するに当たり、最初は描くのがとても大変だと思いました。描くデザインのイメージにとても困りましたが、たくさん考えて富津市にしかない、とても印象に残るものにしようと決め夕日に浮かび出る展望台と富士山を描きました。途中、グラデーションを何色で塗るか迷いました。夕日の空の色合いと展望台・富士山をシルエットにしたり、一番星を描いたり文字の形も頑張って工夫しました。満足に描けてとても嬉しかったです。

これを選んで頂き、皆さんに少しでも良い印象を持って頂け頑張って良かったと思っています。ありがとうございます。第21回千葉県キャンポリーが中止になって悲しかったですが、こうやってワッペンを通じみんなに富津の良さを知ってもらえてとても嬉しかったです。



第5回 千葉県ベンチャー

実行委員長 三塚 学

第5回千葉県ベンチャーでは、実施要項、安全管理マニュアル等を踏まえ隊長集会を開催し、スカウトの自主性を尊重し、スカウト自身が運営に関わり進めていけるよう情報共有を行いました。

新型コロナウイルス感染拡大で、令和3年8月から令和4年3月25日～27日に会期の延期を決定し、この状況下でも事前の隊長集会を10回行いましたが、新型コロナの影響は非常に大きく、最終の参加者は15名となりました。

大会では、天気予報等をスカウトが事前チェックしてキャンプファイアを1日目に変更を申入れてきて、初日は、設営後各グループのプロジェクトを進め、グループの人間関係が築かれキャンプファイアでスカウト全体の仲間意識が高まりました。それは、2日目のパイオニアリングの構築時の進め方でグループの動きに現れていました。仲間役割分担し、安全に充分配慮して進め、構築後信号塔に昇り達成感を味わっていました。ミニフォーラムでは「新型コロナウイルス」と「ウクライナ戦争」について各自の意見を発表し、考え方の異なる相手がいることを感じてくれたことは良い経験となりました。

全体をとおして大会目的である「多くの仲間と交流し、共に活動できる素晴らしさを体感する」ことを、この大会に参加したスカウトは実感できたと確信します。

第5回 千葉県ベンチャーに参加して

千葉第1団 猪又 悠生

今回のキャンプは、ベンチャー隊に入ってから初めての2泊3日のキャンプで、いろいろと薄い記憶をたよりに行ったため、隊長に教えてもらいながらやる事が多くありました。しかし、そのおかげで思い出したことも多く、また、他の団の人から教わったことも多くあり、とても意味があったと言えます。

グループでの活動やプロジェクト活動を通して他のメンバーと協力して行動することができました。また、今回は他の人が積極的に話しかけてくれ、有意義な活動ができました。

キャンプファイアは、それぞれがゲームやスタンプを持ってきており、自分が知らないものも多くありましたが、他の人に合わせたりして楽しむことができました。

パイオニアリングは、初めての大型構築物で大変なところや、もっと考えて工夫すれば効率よくできたと思います。今回できなかったこと、知ったことは今後に生かしたいと思います。

ロシア、ウクライナの戦争について、今回参加した人と話したことで、新しい目線でものをみることができました。

今回の第5回千葉県ベンチャーを通して学んだことは多く、このキャンプに参加して良かったと思います。



令和3年度 スカウト活動発表会

令和4年3月21日(月・祝)千葉市幕張勤労市民プラザにおいて「スカウト活動発表会」が開催されました。

- 単章取得のための取組について
(銚子第3団 小林 隼也)
- 仏教章取得について思うこと(柏第1団 新井 紗彩)
- 2019, 2020年度合同富士スカウト顕彰会に参加して
(千葉第18団 木谷 実里)
- 日韓スカウトフォーラム交流計画プロジェクト
(我孫子第1団 東儀 隆範 流山第3団 伊藤 芳治 船橋第3団 竹内 佳奈)
- 特別発表 「千葉県ローバーの環」実施報告
(千葉第18団 木谷 実里 千葉第6団 松田 恭佳)
の5テーマが発表されました。

千葉県ローバーの環

千葉第18団ローバースカウト隊 木谷 実里

令和4年3月12日～13日に、千葉県連盟に所属するローバースカウト年代を対象とした「千葉県ローバーの環」を開催いたしました。「千葉県ローバー」としての繋がりを強固にし、ローバースカウト活動の更なる発展と活躍を図ることを目的とし、33名のローバースカウトが集まりました。12日はオンライン、13日は船橋市青少年キャンプ場にて活動を行いました。

スカウトスキルを活用したゲームのほか、世界スカウト機構の提供する新しい環境教育プログラム「Earth Tribe」の要素を取り入れたプログラムを展開しました。千葉県特有の害獣問題について取り組むチャレンジなど、地球環境を守るための24のチャレンジをビンゴ形式で行いました。2年間自粛を余儀なくされ、対面での活動を行うことのできなかった多くのローバースカウトにとって、「千葉県ローバーの環」は、今後の活動への希望を与えることができたのではないかと思います。



～ニューカリが丘～
MORIBITO
もりびと

ボーイスカウト歴 18年の
担当が自信をもってご案内します

森と共に生きる住まいで、自然に触れながら暮らす
オープンハウス開催中!

街づくり企業
山乃株式会社

ニューカリが丘街ギャラリー
後援者ニューカリが丘(株)1-1
(営業時間)10:00～17:00(土・水曜日定休)

▲ホームページ ▲YouTube
0120-318-154

【発行者】

日本ボーイスカウト千葉県連盟

〒260-0001 千葉市中央区都町2-1-12 千葉県都町合同庁舎4階

TEL.043-235-8070

運動拡充委員会 編集責任 宇山 健太

詳細は、日本ボーイスカウト千葉県連盟ホームページをご覧ください <http://www.scout-chiba.jp>



お問合せは